氏　　　　名	伊藤　真理
授与した学位	博　士
専攻分野の名称	看護学
学位授与番号	博甲第５９９３号
学位授与の日付	平成３１年　３月２５日
学位授与の要件	保健学研究科　保健学専攻 （学位規則第４条第１項該当）
学位論文の題目	食道切除再建術後の急性期にある食道がん患者が主体性を発揮していく過程
論文審査委員	教授　森本美智子　　教授　小野智美　　准教授　沖中由美

学位論文内容の要旨

本研究の目的は，食道切除再建術後の急性期にある食道がん患者が主体性を発揮していく過程を術前からの先行要因を含めて明らかにし，その主体性発揮を支える看護実践への示唆を得ることである．研究参加者15名を対象とし，参加観察および半構造化面接にてデータ収集し，Modified Grounded Theory Approachの手法を用いて分析した。

結果，術後急性期の主体性発揮は，『“生”の取り戻しのために自分を前に進める』過程であり，術前から始まる『自分の足場をつくる』ことによって支えられていた。先行要因は，術前より【手術後を見据えて助走を始める】，または〔手術を決めた時から最高級客船に乗り込み医療者の舵取りに任せきる〕という2通りの過程であった。参加者は，術後急性期に【軸足をお任せから自分に移し息をするしかない・動くしかない】，【体の持ち主ならではの感覚を使いこなして息をしていく・動いていく】という姿で自分を前に進めていた。

看護師は，過大侵襲手術後の過酷な状況でも患者が動作主は自分しかいないと覚悟し行動できるように，術前から準備を始める必要があると示唆された。

論文審査結果の要旨

食道切除再建術は，食道がんに対する優れた治療であるが，患者への侵襲は過大であり，術後急性期は特に医療者主導で医療がすすめられやすい。しかし，身体が急激に変化するこの時期であっても患者は主体性をもち，体の変化に対応しようとしている可能性がある。本論文は，「主体性」の概念分析（副論文）を行ったうえで，実施された研究である。食道切除再建術を受けた食道がん患者15名に対して，術後7日目までの状況を参与観察したうえで，ICU退室後に面接法でデータ収集をし，患者が主体性を発揮していく過程をM-GTAで明らかにしており，以下のような成果を得ている。

1）食道切除再建術後，急性期にある食道がん患者の主体性を発揮する過程とは，『“生”の取り戻しのために自分を前に進める』および『自分の足場をつくる』をコアカテゴリとした過程であることを示した。

2）術後急性期に自分の身体感覚を使いこなす学習が既に始まっているという新知見をカテゴリから示した。

主体性に着眼し，これまで関心が希薄であった術後急性期看護領域において，主体性発揮過程を明らかにした点は，臨床的に貴重である。専門看護師という実践能力を活かした参与観察と面接法で，データの信憑性が高められており，これは本論文の優れた点である。よって，本論文を博士の学位に値する論文であると判断する。

審査員は，論文内容およびこれに関連する事項について試問を行った結果から，合格とすることを適当と認める。